

Alan Westin "Privacy and Freedom" の 「現代的プライバシー権の起源」に関する考察

小向太郎^{†1}

アラン・ウェスティン『プライバシーと自由』は、現代的プライバシー権として「自己に関する情報をコントロールする権利」を提唱したことで知られるプライバシーに関する重要文献である。この大著は「現代的プライバシー権の起源」という章ではじめられており、「動物界のプライバシー」「原始時代のプライバシー」を概観した上で、現代的プライバシーがどのような理由で生じてきたのかを論じている。本報告では、ここで行われている検討について、本書発表後に発展した進化心理学における議論との関係を考察したい。

Discussion on "The Origins of Modern Claims to Privacy" by Alan Westin.

TARO KOMUKAI^{†1}

Needless to say Alan Westin's "Privacy and Freedom" is an important book on privacy that is known for proposing a modern privacy right. The book begins in the chapter "The Origin of Modern Privacy Rights." After reviewing "Privacy in the animal World" and "Privacy in the Primitive World", the reasons why modern privacy has arisen is discussed. In this paper, I would like to consider the relationship between the discussions made here and the discussions in evolutionary psychology that developed after the publication of the book.

1. 「起源」の位置づけ

アラン・ウェスティン『プライバシーと自由』は、現代的プライバシー権として「自己に関する情報をコントロールする権利」を提唱したことで知られるプライバシーに関する重要文献である。冒頭に掲げられたウェスティンの次のようなプライバシーの定義は、市民の自己情報コントロール権を提唱するものとして有名である。

「プライバシーは、個人、集団・組織が、彼らに関する情報が、いつ、どのように、どのような範囲で伝達されるのかを、決定する権利である[1, p.5]」

この定義に続けて、次のような指摘をしていることも重要であり、現在に至るまでのプライバシーや個人情報に関する課題を提示している。

「個人のプライバシーへの欲求は断固としたものなどではない。社会へ参加するということも、

同様に強い欲求だからである。したがって、個人だれでも、プライバシーへの要求と、彼の属する社会によって規定された環境上の条件や規範に照らして、情報を開示して他とコミュニケーションしたいという欲求とのバランスを取るという過程で、常にそれぞれが調整を行う必要がある[1, p.5]」

このような考え方を導き出すために、ウェスティンは、(1) 社会におけるプライバシーの機能 (The function of privacy in society) , (2) プライバシーを侵害する新しい手段 (New tools for invading privacy), (3) アメリカ社会におけるコントロールのための取組: 5つのケーススタディ (America's struggle for control: five case studies), (4) 1970年代のための政策の選択肢 (Policy choices for the 1970's), という構成で議論を進めている。

そして、情報技術の発展によってプライバシーを侵害する新たな危険が生じていること、これに対してアメリカ社会はすでに対応しつつあることを指摘し、このような危険を避けるための政策のあり方を提言している。特に、こうした危険の一つとして、コンピュータを利用した個人情報の集

^{†1} 中央大学
Chuo University

中管理によるデータ監視の危険性を指摘している点は、重要であろう。

本稿でとりあげる「現代的プライバシー権の起源 (The Origins of Modern Claims to Privacy)」は、(1) 社会におけるプライバシーの機能の冒頭部分に当たり、「動物界のプライバシー」「原始時代のプライバシー」を概観した上で、現代的プライバシーがどのような理由で生じてきたのかを論じている。

2. 依拠している理論

ウェスティンは、「現代的プライバシー権の起源」について論じるに当たって、生物学、生態学、人類学における学術的成果を参照することが重要であるとしている。これは、ウォーレンとブランドイスの「プライバシーの権利」が、徹底してコモンロー上の権利としてプライバシーを認めるべきかという観点から検討を行っているのとは、対角的である。

参照文献として特に重要な扱いがされているのが、エドワード・ホール『かくれた次元』[3]と、ロバート・アードレイ『縄張りの原則：所有権と国家の動物起源に関する身元調査[4]』である。

ともに、人類が互いの距離に関してどのような行動を取るかということを、動物行動にその起源を求めて考察したものであり、空間が生物にとって、また人類にとっても重要な意味を持つことを示している。例えば、ホールの提唱した「密接距離 (intimate distance)」「個体距離 (personal distance)」「社会距離 (social distance)」「公衆距離 (public distance)」などの概念は、現在でも Social Distancing といった考え方に引き継がれている[3, pp163-181]。

ウェスティンは、動物に関する学術的成果からは、次のような結論を導き出している。

「すべての動物は、一時的な個別隔離または小単位での近接を求める傾向があり、これらはプライバシーのふたつの主要な側面を構成する。動物はこれと同時に、自身の種のなかで社会的出会いによる刺激を求める。その結果、プライバシーと参加のバランスを取るために葛藤することが、動物の基本的な生活様式になっている。この意味で、プライバシーの探求は人間だけに限定されず、すべての生命の生物学および社会的プロセスで発生する[1, p. 17]」

原始時代の人類にとっては、孤立が現実的ではなく危険を生じるものであったために、このような葛藤は限定的であったのに対して、個人の孤立が可能になる現代社会においては、プライバシーがより重要になっているということが指摘されている。

このような分析が、個人に関する情報が増大し、社会の好奇心が情報収集・監視の危険が増大させる現代社会においては、こうしたプライバシー侵害に対処するために、自己に関する情報をコントロールする権利を認めるべきだと言う主張につながっている。

3. 進化生物学の発展と示唆

ウェスティンの『プライバシーと自由』が書かれたあと、生物学や生態学は、急速に進化論的基礎を重視するようになっていく。特に人間の行動と進化との関係については、さまざまな研究がされている。代表的な分野として、進化心理学がある。進化心理学は、人の心理や行動が自然選択によって形成されたことを仮定して進化生物学的な枠組みの中で心理を研究するものであり、人間の行動に進化論的基礎から説明しうるものがあるということについては、一定のコンセンサスが形成されている[5]。

さらに、倫理や正義の概念を進化との関係で捉えようという分野として、進化倫理学がある[6]。もともと、環境適応的な制度や正義が望ましいものであるという考え方には反発が大きい。一方で、ある正義の概念や制度がどのような進化論的基礎によって説明されうるのかといった検討は、有効な場合があると考えられている[7]。

ウェスティンによる生物学や生態学の成果の援用は「プライバシーへの欲求と開示の欲求の相克は、他の動物にも見られる生物に普遍的なものである」ということを示すものであり、バランス論を導き出す根拠にはなっていない。しかし、進化生物学の人間行動への援用が発展を遂げている現在から見ると、①プライバシーの性向はなぜ自然選択において適応的なのか(例: 個体の生存優位、性優位、他の要素の副作用、集団の生存優位または他の生存優位要素の副作用)、②プライバシーに関する利得にはどのような物が考えられるのか(例: 情報共有の最大化、シグナリング効果の最大化等)、③利得の最大化はどのような制度なら実現できるのか、といった論点も、今後の検討課題になり得ると考えられる。

参考文献

- [1] Alan F. Westin, “Privacy and Freedom” (1967).
- [2] Samuel D. Warren & Louis D. Brandies, “The Right to Privacy”, 4 HARV L.REV. 193 (1890). 邦訳として、外間寛訳「プライバシーの権利」戒能通孝・伊藤正己『プライバシー研究』（日本評論社、1962）1頁以下.
- [3] エドワード・ホール『かくれた次元』みすず書房（1970年）.
- [4] Robert Ardrey, "The Territorial Imperative: A Personal Inquiry into the Animal Origins of Property and Nations"1966,
<https://web.archive.org/web/20120313041336/http://ditext.com/ardrey/imperative/imperative.html>.
- [5] 長谷川真理子「進化心理学の展望」科学哲学 34・2（2001年）11・23 頁.
- [6] スコット・ジェイムズ『進化倫理学入門(児玉聡訳)』名古屋大学出版会（2018年）.
- [7] デビッド・スローン・ウィルソン『社会はどう進化するのか（高橋洋訳）』亜紀書房（2020年）.